マイアミでの研究留学を通じて

University of Miami
Sylvester Comprehensive Cancer Center
玉井　翔
金沢大学脳神経外科

上原記念生命科学財団のご支援を賜り、2025年4月より米国マイアミ大学シルベスター総合がんセンター(University of Miami, Sylvester Comprehensive Cancer Center)に留学させていただいております、玉井翔と申します。

当該がんセンターは米国南端に存在するNational Cancer Institute (NCI)です。その起源は医学部で誰もが一度は耳にする、パパニコロウ染色を開発したDr. George PapanicolaouがPapanicolaou Cancer Research Instituteを設立したことに始まり、毎日その銅像を拝みつつ通勤しております。マイアミ大学は2025年で設立100周年の節目を迎え、多くの式典が行われました。新たな研究棟や病院も複数増築されており、同大学が歴史を重んじつつも絶えず変革し続けていることを感じています。施設内にはヤシの木やカジュマルといった、日本ではなかなか目にしない南国の植物が多数植えられており研究棟間の移動も目の保養になっています。

私が所属するProf. Iavarone, Prof. Lasorellaラボはコンピューター解析を行う「ドライラボ」と「ウェットラボ」を有する、国際色豊かな研究チームです。メンバーはPh.D.が大多数と私にとってはじめての環境であり、研究一筋の彼らからみた脳腫瘍は臨床と研究を行ってきた私には新鮮で日々刺激を受けています。

多種多様なバックグラウンドを有するメンバーには今まで当たり前だと考え、疑問にも抱いてこなかった脳腫瘍研究に多くの課題・可能性があることに気づかされました。現在、膠芽腫(Glioblastoma)の独自のサブタイプ分けに基づいた再発形式および治療方法の確立に関する研究をはじめ、当該研究室が第一線に立つ脳腫瘍におけるFGFR3-TACC3融合遺伝子変異に関する研究などに従事しております。

マイアミは全米でも人口増加率が高く、多数のビルが建設ラッシュのさなかにあり街に活気があります。春の桜や冬の雪が恋しくなることもありますが、一年を通して温暖で冬でも過ごしやすい都市です。そんな気候もあってかマイアミ市民は明るく気さくですが南米が近いこともあり、日常会話の多くは英語ではなくスペイン語であることなど実際に生活する中で多くの発見があります。特に街中では多数の野生のニワトリやイグアナが闊歩し、高層ビル間を流れる川にはワニ注意の標識があり、その川を覗くと野生のマナティが悠然と泳ぐような、自然と都会の喧騒が入り混じる独特の景観には日々驚いています。

末筆ではございますが、このような貴重な機会を与えてくださいました上原記念生命科学財団の皆様に心より感謝申し上げます。今回の経験を活かし、今後も研究および臨床の面から社会に貢献できるよう一層精進してまいります。



Dr. George Papanicolaouの銅像(左)と野生のマナティ(右)